

うるおい

倉橋惣三選集 第二巻より



山田徳兵衛氏筆

園丁が日々に忘れてならぬ任務の一つは、その花園にうるおいをたやさぬことである。彼は朝夕に如露を携えて水をそそぐ。見よ、その如露の口からそそがる細い柔らかな霧の雨を。あえぐように疲れている花も、萎えるようにうなだれている葉も、今はそのうるおいに蘇って、色もつややかに、生き生きとして面をあげる。園丁はこうして、一つの花をも枯れさせまいとする。そのうるおいの恵みに漏れさせまいとする。そのためには如露の底を傾けて、一滴の水も残りなく与え尽そうとする。実に花園のうるおいは、園丁のもっとも苦心する大きな責任の一つである。

けれども、園丁の如露はいかにも浅く、いかにも小さい。彼はその如露を満たすために、しばしば貯水池へ帰らねばならない。そうして、そこからうるおいの資を汲まなければならない。そうしなければ小さい如露が直ぐに虚になるのである。自分自身が直き涸れてしまうのである。

かくて園丁は、先ず自らにうるおいのたえぬことを苦心する。住いては汲み、往いては汲み、実に断え間なく汲むことを怠らな

い。
○
草花と同じく、断えずうるおいを要求しているものは幼児であ

る。しかも、如露よりも浅く小さく、直き洞れ易いものは我々の心である。断えずうるおいの与え手とならなければならぬ。我々のもつとも大切な修養の一つがこの点にある。

菊池 ふじの(談)

この「うるおい」、この中に倉橋先生のおっしゃりたいことが、全部出ていると思いますよ。

保育者としての心の中にあるべき姿、心の根本のありようのすべてが含まれています。倉橋先生の説かれた保育原理、また保育に対するお心持ちはみんなこの上に立っていると私は信じています。倉橋先生を知っていらっしゃる方も、ご存知ない方も、味わってごらんになるといいと思いますので、これを選ばせていただきました。

堀合 文子

前に読んだはずの雑草をまた、読む機会を与えられました。まず、自分が毎日接している幼児たちに、「うるおい」を与えているだろうか。

いや、「うるおい」どころか、一人一人を大切にとか、子ども

の心をよく考えてとか、子どもの状態を見てとか、子どもの自由を尊重してとか、遊びを充分にとか、何か理論のような理屈のよいなことは、私も言っているし、世の中でも言われているが、子どもたちに一番大切なるおいは与えていないではないか。花咲爺さんのお話の中の瀬戸かけがらがらのような雑物を与えてしまつて、子どもたちはその瀬戸かけなどで押つぶされてしまつていくようだ。それでも「うるおい」の文の中にあるように、子どもたちは、草花と同じように、断えずうるおいを要求して、そのうるおいによって成長しているので、雑物を与えられても、なお成長しようとするおいを要求しているだろう。

この忙しい、せわしい社会に生活している大人も子どもも、今一番、要求したり、要求されているのはこのうるおいである。そしてそのうるおいすらあること、あったことを忘れていく。「うるおい」の中にあるように、子どもにうるおいを与えるのは私ども保育者の責任で、教育熱心のあまりか、このうるおいを自分も持たず子どもに与えることもつい忘れてしまふ。

新卒のころは、自分の一挙一動、一言一句をいちいち意識して、これでよいのか、こんな言葉をいっては、こわく感じないか、子どもの心を傷つけはしないかと考えながら、顔の表情、心の持ち方、声の出し方まで考えてやったものだ。それが、何年何

年と年を重ね、経験と言うものが自分の身について来てしまった今は、どうであろう。新卒のころの心づかいは、馴れの一語にくるめられてしまい、子どもたちにいる、おいなどは一滴も与えてない自分を、今、うるおいを感じ、保育者としての価値があるかどうか、残るのは経験を自分のみにすぎない空しさを感じました。

今までも時折反省して、昔の自分はこうでなかったと、子どもへの接し方も変えると、幼児は正直で、その反応は歴然とあらわれてきます。それでも、自分の中にそのうるおいを補充する器はすぐ涸^{かわ}いてしまい、うるおいはまた枯れてしまいます。そして子どもまで涸^{かわ}かしてしまいます。

保育者はそのうるおいが次々に出るようになる、おいの器を常に満たすよう努力しなければなりません。それは研究したから、できるものでもないでしょう。しかしそのうるおいはたくさんのおき栄養をふくんだ、子どもたちの心も体も生き生きとするうるおいでなければなりません。保育者は常にこれをたくわえ、なくなれば汲み、なくなれば汲んで常に絶えることなく汲むことを怠らないようにするのが私共の仕事でしょう。

漱石がある時人に、なぜ忙しいのに昼寝をするかと問われ「私は忙しいから昼寝をする、大臣たちが忙しく出かけたり仕事をし

ているのはそれだけ余裕があるからやっている、私は忙しいから昼寝をする」と言われたとのこと。やはり「勝れた人は心のうるおいを絶えず蓄えることができる」と「うるおい」の中にもありますが私たち凡人も心して自分の中にうるおいをためておくよう努力することが大切でしょう。

教育者としても労働のみにおわるのではなく、いかにうるおいを自分の中に蓄え、幼児に与えるかが次の課題でしょう。

この「うるおい」の倉橋先生のお話は、幼児教育の原点で、人間が成長していく上に大切なことで保育者の根本の心構えを教えただけではありません。

うるおいも、人一人ずつ考え方が、とり方が違うと、子どもたちにはうるおいでなくなる場合が出てくるでしょう。

うるおいは目に見えない幼児教育の一つで、この幼児教育はどんな高級な理論や技術にもまさり、また必要なくことのできな

いことです。私も、頭では知っているし、わかっているのに、忘れていたこのうるおい、またなくしてしまつたうるおい。どんなに立派な保育をしても、どんなによかつたと思つても、このうるおいを忘れてはいないでしょうか。そして本当に、本当のうるおいをためておくことも、なくなつたら常におぎなうことも。

三十余年前の倉橋先生のお話、今こそ私共の教育の中に生かしていかなければならないのではないのでしょうか。現代のうるおいは私共がどんな形でどんなうるおいとして与えたらよいか、もう一度倉橋先生の雑草から考えてみましょう。(お茶の水幼稚園)

大 和 檀

倉橋惣三選集(二)を読んでいたら―私は今回初めて読みました―何とはなしに泣きたくなってきた。

私の中にある寒風、張りつめた力み、何か何かとあせているイライラ、そんなものが、もしも、「倉橋おじさん」と私は呼びたくなります―に会ったら、スーッと溶けるだろう。

「春が来る」、ああそうだったのだ、春が来るってこんなことだったのだ。「春」早くこいこい、はる、はる、はる、はる。

私も「まゆみお婆さん」と呼ばれるように年をとりたい。そうなるように今を積み重ねたい。

でも今は、私だって喉が乾いているのです。けれど、私は、自分の手と足とで汲んでこなくてはならないのですね、「うるおい」を。どこに行けば汲んでくれるのでしょうか、私のいう「うるおい」は。

如露は、「うるおい」がなくなっても、完全に虚になっても、

貯水池から資を汲んでくれば、またすぐに満ちて来ます。

ところが、私の方は、本当に涸れてしまったら、すぐそばに「うるおい」の資があっても気づかないのでは、と恐くなります。「うるおい」の汲み手でなければならぬということは、うるおいを汲めなければならぬ、とともに、うるおいの資を見つけられなければなりません。

「求めよ、さらば与えられん」なのだろうか。なくならなければ求めないし、しかし求めているうちに全くなくなってしまい、うるおいを汲んでいるのに気づかない、ということはないのだろうか。

いろいろ心配だけれど、私の手と足を信じよう。如露には手と足がないから自分では汲んでこられないけれど、私は「うるおい」がなくなったら自分で汲んでこられる可能性があるのだし、チップビリだけは残しておこう。

それに、もしかしたら、もしかしたら、他の人が汲んでくれるかもしれないのだから。その時は気づかなくても。

そしてうるおっている時には、どこに資があったのかよく見ておこう。でも「うるおいの資」もなくなってきたら……。

私たちは今、あまりにもこの「地球」をよごしている。

(港区立仲之町幼稚園)